

『平家物語』 国語教育の一側面（4）

— 池月・磨墨 伝説の広がりの魅力 —

武田昌憲

はじめに

『平家物語』という軍記物語世界、また伝承世界を視野に入れた裾野の広さの一つとして「馬」について述べたい。

『平家物語』の中で、那須与一や木曾義仲の伝承・伝説の類いは一族や関係者によって広く伝播するが、「馬」の場合は我が国の伝説の中でも特異ではなからうか。

軍記物語の中で、武士が主人公となり、弓馬の道究めたことから、「馬」について記述するのは必然であるが、『平家物語』の場合は「池月」「磨墨」^{注1}をはじめとして、源仲綱の「木の下」、平宗盛の「南鐮」、熊谷次郎直実の「こんだ栗毛」、子の直家の「西楼」、平重衡の「童子鹿毛」、「夜目なし月毛」、平知盛の「井上黒（川越黒）」、源義経の「大夫黒」、木曾義仲の「き

こゆる木曾の鬼葦毛」等多くの馬が名前付きで登場する。それ以外にも、足利又太郎忠綱の馬や、那須与一の馬など、名前は書かれていないが、場面設定には重要な要素を演じている、実に存在感のある馬が登場する。ただ与一の馬等は、馬の機能性そのものの活躍の場面が少ないことが伝説の拡大に制限があるものと思われる。

流布本『平家物語』巻九、「池月」・「磨墨」の先陣争いは『平家物語』の中でも出色の場面である。池月・磨墨の登場は、頼朝が佐々木高綱に秘蔵の名馬「池月」を与えたことから始まる。梶原景季も同じ馬を所望するが、頼朝からは代わりに「池月」に劣らぬ名馬として「磨墨」を与えられる。梶原は自分が望んでもいただけなかった「池月」を佐々木がもらったことに腹を立て、佐々木と同士討ちしようとする

が、佐々木の機転でその場が収まり、続けて二人は先陣を意識する渡河戦の場面に移ることになる。

ここも中高の教科書・授業でもしばしば取り上げられる名場面の一つである。この二人の功名争いが寿永三年（一一八四）の宇治川の先陣争いで、「池月」に乗る佐々木高綱と「磨墨」に乗る梶原景季の巧妙な駆け引きの逸話が『平家物語』で語られることで全国的に知れ渡った。戦の場面ではあるが血なまぐさい殺し合いの場面ではないところが、扇的を射る那須の与一の場面と似て、人気のある要素の一つかもしれない。

池月・磨墨の全国の伝承

池月・磨墨の伝説等については、すでに『平家物語大辞典』^{注2}やウィキペディア、ホームページ等に載せられていることではあるが、改めて掲載してみる。

北海道 なし

青森県 上北郡六ヶ所村または七の戸町は池月の

産地。三戸町は磨墨の産地。

岩手県 なし

宮城県 南三陸町は池月の産地。葬った塚あり。

大崎市は池月の産地。栗原市は磨墨の産地等。

秋田県 なし

山形県 鶴岡市は池月の産地。南陽市は磨墨の産地。

福島県 会津坂下町は池月の産地。

茨城県 五霞町は池月の没した地。磨墨の池もあった。

栃木県 鹿沼市は磨墨の産地。佐野市は池月・磨墨を捕らえた地。

群馬県 桐生市は池月の産地。前橋市は磨墨の墓あり。

埼玉県 なし

千葉県 香取市・いすみ市・南房総市は磨墨の産地。

柏市・松戸市は池月の産地等。

東京都 大田区は池月・磨墨の産地。磨墨塚あり。

青梅市は池月の産地等。

神奈川県 横浜市港北区で池月は余生を送った。

同市青葉区は磨墨の産地。 崑山重忠の
愛馬三日月もこの産。 愛甲郡・南足
柄市は磨墨の産地。 相模原市は池月の
産地等。

山梨県 上野原市の龍泉寺で池月は飼われていた。
長野県 松本市の桐原牧は磨墨の産地。

新潟県 なし

静岡県 函南町は池月の産地。 富士市は磨墨と池
月が馬比べをした所。 静岡市葵区は磨墨

が飼われていた所。

愛知県 犬山市は梶原一族が磨墨とともに落ち延

びた所。 磨墨塚がある。

三重県 鈴鹿市は池月の産地。

岐阜県 高山市は池月の産地。 郡上市は磨墨の産地等。

富山県 なし

石川県 中能登町は池月の産地。

福井県 おおい町は磨墨の産地。

滋賀県 長浜市は磨墨の産地。

京都府 宇治市に「宇治川先陣の碑」がある。

大阪府 なし

奈良県 なし
和歌山県 なし

兵庫県 淡路市は池月が育った所

岡山県 なし

広島県 北広島町は池月・磨墨の産地。

山口県 下関市は池月・磨墨の産地。

鳥取県 鳥取市は池月（生月）の産地。

島根県 雲南市、また隠岐の島町は池月の産地等。

徳島県 美馬市は池月の産地等。 小松島市は池月

が石化したという。

香川県 なし

愛媛県 なし

高知県 なし

福岡県 北九州市また岡垣町は磨墨の産地。 小郡

市は池月が佐々木高綱と住んだ所等。

佐賀県 なし

長崎県 壱岐市又対馬市は磨墨の産地。 対馬市ま

た平戸市は池月の産地等。

大分県 大分市は池月の産地。 豊後大野市は磨墨

の育った所等。

熊本県 なし

宮崎県 都農町は池月の産地。

鹿児島県 霧島市は佐々木高綱の居城の近くに池

月の墓あり。指宿市は池月の産地等。

沖繩県 なし

池月・磨墨の産地分布がさまざまであるのは、他の平家伝説と同じであるが、意外にも西日本にも産地伝説が多い。佐々木高綱の關係地に池月の伝説があり、梶原景時・景季の關係地に磨墨伝説が多いのも理解できるが、意外と池月・磨墨のペアで伝説（特に産地）があることに興味が惹かれる。同じ名前の馬を仕立てるもよし、三代目、四代目の池月・磨墨がいてもおかしくはない。伝説の世界では、山地の池と関わらせるために、「生食」ではなく「池月」を用いるところが多い。また『源平盛衰記』では「池月」の産地を陸奥国の七戸立の馬として、その産地が記述されているが、産地の伝説地に『源平盛衰記』の束縛はない。自由に（と言つていくらい）産地伝説がほぼ全国に広がっているのは興味深い。

弓馬の道を重んじる武士への名馬の供給地（牧場等）からすれば、名馬を算出し得ることは重要であった。義経や木曾義仲のような国民的英雄叙事詩の物語・伝説とは異なる要素があるが、数ある平家物語の伝承ルートの一つと言えるかもしれない。

ごく身近に『平家物語』の關係地があることは、教材を身近に感じてもらう良い機会ともなりうるのは言うまでもない。

単なる宇治川での先陣争いに馬が参加しただけではなく、その産地や塚が、身近な存在であったりすれば教材が過去のものとなることはなく、実感することができる。

池月・磨墨伝説を身近なもの（地元と關係あるもの）として楽しみたいという欲求も伝説の広がり要因の可能性もある。

前号^{注3}でも馬との連携を指摘したが、馬は戦場というハレの場における高級車のようなものでもあり、頑強な戦車でもある。死に装束の一部ともいえる。装束描写でも、鞍の説明とともに馬の毛並・体格が描かれ、その馬の由緒も描かれることもある。軍記

物語にはなくてはならない存在である。教育現場では小動物は飼育できても、馬級の大型動物とは接する機会が（教員も含めて）ほとんどないが、それだけに人馬一体の活躍を描く貴重な文学作品といえる。

二つの宇治川の渡河戦

『平家物語』では、「宇治川」の渡河戦は二つあり、授業に余裕があれば、是非この二つを比べて読んでほしい。

最初は、治承四年（一一八〇）の以仁王の拳兵事件の時、宇治橋で激しく干戈を交えている最中、平家方の足利又太郎忠綱が梅雨時の増水での中を、故郷の坂東の故事を挙げて馬筏を組んで集団渡河を行い、敵（以仁王・源三位頼政）を攻めたて勝利に貢献する（巻四）。無事に指揮下の三百余騎を一騎も流されることなく「馬筏」作戦で成功する。「馬筏」については『今昔物語集』巻三十一「陸奥国の安倍頼時、胡国に行きて空しく返りし語」にも安倍頼時が胡国の踏査をした時に胡人の騎馬軍団が馬筏を作って大河を渡るさまを目撃したことが書かれている。騎馬

民族の得意とする馬術であったことがうかがえるし、この技術が我が国の東国へと伝播したものと思われる。この技を若干七歳の足利忠綱が教えとして受け継いでいたのである。ただし、真似をして続けて宇治川を渡河しようとした、伊賀・伊勢の騎馬は途中で崩壊して流されてしまう。人馬一体を得意とする東国武者ならではの技術であることがわかる。ということ、ここでは単騎での渡河は記されていない。しかも、この時の足利忠綱は「生年十七歳」である。登場した時と、渡河戦に成功した時の名乗りのあわせて二回も名とともに年齢が強調される。十七歳という教室で学ぶ生徒と同じ世代の子が、歴史を動かしてゆくダイナミックなさまが描かれていく。宇治川の先陣争いの前段の興味付けとしても、ぜひとも教室でも紹介してほしい。なお、この場面の説明は梶原正昭氏の著書が詳しい。^{注4}

二回目は、本稿で取り上げている、寿永三年（一一八四）一月の宇治川の先陣争いの場面であるが、正月の雪解け水による増水で宇治川の渡河が困難という中で、馬筏を組むことなく、池月を操る佐々木

高綱と、磨墨に乗る梶原景季がそれぞれ単騎で強硬に渡河しようとし、それを成し遂げる様は、足利忠綱の渡河戦とは違い、馬の力量が試される「個人戦」であることがわかる。「池月」は一直線に渡河したが、「磨墨」の方は少し下流に着いたと記されているので器量は「池月」の方が一つ上のようなではあるが、名馬であることは間違いない。二頭とも、馬筏を必要としない力量のある馬であることを示していることが、その後の全国的な伝説を生むことになったと思われる。

以上、二つの宇治川を挟んで馬で渡河する場面は、両者並べること馬の駆け引きが生きてくると思われる。

おわりに

馬と文学のかかわりは軍記物語、又説話集等に限ったことではない。近代文学・近代史においても、馬とのかかわりは軍馬以上のつながりがある^注。

また、文学的には馬といえ「池月(生食)」「磨墨(擦墨)」の名がすぐに挙がる。「馬の文化叢書」の編纂

に携わった小説家の古井由吉も^注。「初めにこの「馬の文化叢書」の文学篇の編纂を依頼された時、私は日本文学における馬と解して、けっしてたやすい仕事とは思わなかったが、さほど難事とも考えなかった。まず「平家物語」の生食・摺墨^{すらすみ}、さらに宇治川先陣の場面が浮かび、それがまたさまざま軍記の、精彩ある馬の描写をかずかずみちびきだしてくるようだった。

—逢坂の関の清水に影みえて

いまや引くらん望月の駒

貫之

以下略

結局氏は明治以降の文学を担当されたのであるが、馬といえ「平家物語」の先陣争いが直結するくらい現在でもその存在感が大きい。世代を問わず両馬が知られているのも、一つには教科書での『平家物語』の扱いが大きいためでもある。地域・世代を問わず、『平家物語』が我が国の伝統文化・伝説を支えている重要な作品であることがわかる。全国にある平家伝説の一つとしての動物伝説は貴重である。また、戦

後しばらくの間は農耕馬や牛などの家畜が道をゆるゆると歩いていた時代もあったが、今では、馬自体を直接見ることは、競馬場・動物園に行くか、流鏝馬神事などの特別な神事・仏事に出向かない限り、日常生活では接することはなくなつた。動物との接点が昔より限定されている昨今において、せめて文学上で間接的にでも馬に接するのも情操教育の一つかもしれないと思う。

注

1 池月は「生飡」「生食」「生月」「活食」「生ずき」等表記されているが伝承上で最も多用されている「池月」に統一する。磨墨も「摺る墨」「ウズミ」等表記されているが「磨墨」で便宜上統一する。同音・同名でも馬が異なる場合が多々あったかもしれない。また、「池月」「磨墨」にあやかかって、同じ名を意識的に付けたかもしれない。また全くの架空かもしれないが、いずれにしても『平家物語』の影響の大きさを感じざるを得ない。

2 『平家物語大辞典』（東京書籍、平成十二年）巻末付録伝説の項「池月と磨墨」（二本松康宏氏執筆）を中心に取り上げる。

3 拙文『平家物語』国語教育の側面（3）——木曾最期伝説の広がりの魅力——（『尚綱語文』六号平成二十九年三月）

4 梶原正昭『頼政拳兵——平家物語鑑賞——』（武蔵野書院 平成十年）

5 たとえば「文学——馬と近代文学」（馬の文化叢書 第九卷 平成六年 馬事文化財団発行）では、古典文学的イメージの濃い馬は最近まで文学の重要な要素であったことを再認識させる。

6 注5の解題、524pによる。